「愛知用水だより」第 1 号：1956（昭和 31）年 12 月 10 日

愛知用水期成同盟会・愛知用水土地改良区による「愛知用水新聞」No. 20 が 1953（昭和 28）年 10 月に刊行を終えた後、愛知用水土地改良区の機関誌として新たに刊行された月刊誌で、現在の「愛知用水だより」の原型である。愛知用水公団が設立され、愛知用水事業が実質的に動き出してから発行されたもので、愛知用水事業の具体的な進捗状況や、また愛知用水土地改良区の運営状況、また事業完了後の受益地域問題・賦課金等の問題などが詳細に記載されている。

1965（昭和 40）年 11 月 10 日第 75 号まで発行した後、一時休刊し、1978（昭和 53）年 1 月 1 日に再刊され、現在に至る。

（1）　第1号　愛知用水だより　昭和31年12月10日発行（月刊）

愛知用水だより

発行所
名古屋市中区
南外堀町6-1
（愛知県土地改良会館内）
愛知用水土地改良区
電話④7593
編集兼発行人
日高啓夫

いつ水はくるのか

工事の計画と見通し

昨年十月十日に、愛知用水公団が発足してから、すでに一年余が過ぎた。

いつ工事に着手するか？――このことは受益者のもっとも関心をもっていることであろう。

公団はこの一年間、着工の準備に忙殺されていた。農林省から引きついだ基本計画を再検討し、一部を変更して、実施計画案を作成し、これによって来年一月中に世界銀行から正式に借款の調印をして、直ちにダムの本工事にとりかかる運びとなった。水路もいよいよ来年には着工されるのである。

公団発足前に農林省が作った基本計画に基いて、公団は今まで慎重に、そして綿密に再検討を行ってきたのである。すなわち技術的にみて最も経済的な路線を、しかも現地農民の希望も考慮して、再検討を重ねてきたのである。

農終的の実施計画までには、なお多少変更されることはあろうが、大体この計画によって実施されるとみてよいであろう。

ダムの工事は近く始まる

この用水のみなもとなる牧尾ダムは、最初の三浮地区にコンクリート・ダムを築造するというが、世界銀行の御指導で、牧尾橋とともに御在山ろくの谷間に高さ百七十メートル、頂部の長さ三百メートルの堤体を築造する。

ダムの工事は、本年一月中に世界銀行から正式に借款の調印をすませ、ダムの本工事にとりかかる。

ダム築造の際の原料となる粘土や岩石は、すべて現場のすぐ近くで採取され、工期費節約の一役となっている。

幹線水路で最初の計画から変更された点

農林省当時の基本計画から変更された主要な点は次のものである。

❶尾張第七、白山の西側を迂回する路線を、尾張第十六、白山を経て山付近から日海村の中央部を通ってぬき下トンネルで西浦村に至る路線は大きく東へ移された。❷旧八幡町で大規模なポンプで揚水して、知多半島の尾根を通す案は、八幡ポンプ場を廃止して、自然流下によって尾根の地質取の補償交渉も進められており、世銀との借款の調印が終ればいつでも直ちに本工事にとりかかることができる態勢にある。

牧尾橋（白線はダムの断面）

水路工事はいつ始められるか

実施計画は第一次、第二次分とをダム築造、第三次分として、それ以後終点までの水路が順次縦覧に供される。しかる後に着工されるのである。

兼山の取入口から内海町の内海寺までの幹線の総延長は、約一二二キロ（内福寺から師崎の終点まで）となる。

兼山の他の無補償施設は、それ以前に進められていく様子である。

しかして第一次分が縦覧に供せられるのは、本年十一月までに、第二次分は来年三月までに、第三次分は六月までにと手筋されている。

そのうち暗き早々、第一次分が六月から、第三次分が九月からということになる。がとにはすべて順調にいっての場合の計算であるから、実際にはいくぶん遅れてくるとみられる。

完成は

着工さえすれば、最新式の機械化工法によって、どんな工事が入口から高蔵寺町地内の庄内川を越える年内には完成できるであろうとみられるから、予定期間の五年内には完成できるであろう。

愛知県トラック協会
中部トラック協会
会長　長尾芳郎
専務理事　本川辰己
名古屋市中区下茶屋町57
電話南局㊟0075―0078